

多年生雑草防除をかえりみて

水田に各種多年生雑草の発生がみられるようになったのは、昭和45年前後と思われる。その当時の発生面積は約110万haであった。それが2年毎に6回調査の結果では、その発生面積は年々増加し、昭和57年では延370万haとなった。そのうちの278万haが要防除面積で、この面積は水稲作付面積の1.6倍と極めて大きなものである。特に発生面積の多いホタルイ(91万)、ウリカワ(83万)、ミズガヤツリ(54万)である。このようなことから、昭和45年頃より多年生雑草用除草剤17剤、中期剤22剤、後期剤5剤の計43剤が農薬登録され普及に移っている。しかも、これらの薬剤の大部分は1薬剤の使用面積が30～60万haと広域性のものである。さらに除草体系によって処理されているので、多年生雑草の発生面積は減少するものと思われていたが、前述の通り逆に発生面積が増加しているのが現状である。これはどうしたことであろう。その原因について今後明らかにしていかなければならないと思うが、考えられるのは、これら多年生雑草の発芽～発生が複雑である。すなわち、発芽～出芽の状態が種子発芽するものもあるが、塊茎・地下茎・鱗茎などによるものが多い。休眠がまちまちである、発生深度が浅いものから深いものとある。また発芽温度も10℃の低温から高温30℃ということもある。発芽から出芽までに20～30日に及ぶものもある。一方、除草剤の散布も兼業農家が多くなり、日曜百姓が大部分であるので、適期防除が行なわれない。ノビエか多年生雑草のどちらかが適期防除されていないことなど発生を多くしている原因でないかと思われる。

目次 (第18巻第10号)

21世紀に向けた農業技術研究推進の 方向とその条件……………	2
＜農林水産技術会議事務局長 榊淵欽也＞	
農薬の生産と使用の動向……………	4
＜農薬工業会会長 宗 展生＞	
エジプトにおける稲作と雑草防除に ついて……………	7
＜九州農業試験場 高林 実＞	
丸山式T型多口噴頭による畑地用細 粒剤散布……………	11
＜丸山製作所＞	
昭和59年度春夏作芝生関係除草剤・ 生育調節剤試験成績概要……………	13
＜財団法人 日本植物調節剤研究協会＞	
昭和59年度桑園関係除草剤・生育調 節剤試験成績概要……………	19
＜財団法人 日本植物調節剤研究協会＞	
昭和59年度春夏作野菜花き関係除草 剤・生育調節剤試験成績概要……………	22
＜財団法人 日本植物調節剤研究協会＞	

早急にこれらの原因を究明し、多年生雑草の防除の徹底を期することが水田除草剤の使命ではなかろうか。

〔財団法人 日本植物調節剤研究協会専務理事 吉沢長人〕